



研究

織田信長の道路改良

長谷川久一

平清盛によつて、其の根基を築かれ、頼政、義仲、義經等の犠牲者を出した後、頼朝に至つて成立した武家政治は其の執行に於ての手振りは、著しく武家的であつて、施政の大體から云へば、辣腕に過ぎて穩當を缺く點が尠くなかつた。爲めに頼朝は政治を執る以外には不幸な人となつてしまつた。弟義經を朝廷で庇護せられたといふのを口實にして、全國に守護地頭を置いたりしたなどは、肉親の恃むべきものを振り捨てて、皮肉極まる勢力擴張の手段を弄したと斷するの他は無い。斯る次第で終に義經は素より範頼までも失つてしまひ、其の子頼家は不肖の子であり、實朝は萎縮して伸びることが出來ず、終に源家三代にして北條氏（平氏）が代つて政局に立つことゝなつた。是れ蓋し彼の政治振りが、後鳥羽上皇の御歌に所謂「道ある世」を以て理想としてゐなかつたことに原因してゐるのである。されば此の覆轍を能く見てゐる織田信長が、其の施政上に「道ある世」を目標として進んで行つたのは、當然彼として選ぶべき方針であつたと見てよからうと思ふ。

彼れが此の世をば「道ある世」となさんとするに當つて

は、己れ自ら系譜正しき筋道ある氏族たるを示さんとしたのであつた。信長は普通に平氏と稱せられてゐる。然るに

故田中博士の深遠な研究の結果は、自分で勝手に平氏と名のつたのだと云ふことである。即ち家譜を研究して見ると織田系圖に平資盛の裔とあるが、資盛の子となつて居る入道覺盛は、續後選集の和歌から附會せられたので、元來織田家の祖ではあるまいと云ふ推定から、更に他の方面に史料を取つて、文書の上で、織田氏が藤原姓なることが立證せられて來た。斯く藤原氏なるに拘はらず、彼が平氏を稱したのは、炯眼なる彼が正に新陳代謝しつゝある時運を察し源氏たる足利氏が、最早人望の屬しないことを觀取し、源氏たる足利氏の次に、之に代つて天下の權を握るべきものは、平氏でなければならぬと考へ、進んで平氏を名乗つて以て人心を收攬しやうとしたのだといふ。吾人としては學殖豐富なる博士の説が萬誤り無かるべきを信するに吝ならざる次第であり、且つよしや多少の誤ありと假定するも、信長の施政方針が實に寸分水も漏らさぬ周到振りであり、

只管正道に違はざらんことを是れ努むる精神の顯はれを、こゝに認め得べしと信するのである。

信長が足利氏に代つて、天下の政權を掌握するや、敢て幕府を置かず、皇室を奉戴し、勅命を奉じて天下の政治を行つたといふことは、實に頼朝以來數百年も續いた所の幕府を廢したもので、同じく武家政治といふ中にも、慥かに一種の變態であつた。斯るが故に、信長は將軍足利義昭から、副將軍若くは管領たらしめむとせられたるに拘らず、之を固辭して受けず、遂に武家特有の官職たる將軍職に就くこと無くして、右大臣を以て終つた。蓋し戰國時代に於て、海内統一の機運が、國民の尊王心によつて、大に動いたものなることは、實に争ふ可らざる事實である。而して明敏なる信長は、この天下の大勢を洞察し、最早幕府の政治が天下の人心を繋ぐ所以にあらざることを知つて、こゝに皇室中心主義で天下に號令しやうとしたのである。彼がいかに「道ある世」の招來を熱心に心掛けてゐたかは、これで能く知られることと思ふ。

元來信長の皇室中心主義は、其の敬神の念慮の厚いのに起因してゐる。彼の敬神事業は、尾張津島牛頭天王神社修築から始まつた。次で又彼は、熱田神宮を修造した。これはかの永祿三年桶狭間合戦の發途の道すがら、熱田神宮に參詣して、戰捷を祈り、首尾よく大勝を博してから、歸途御禮參りとして又熱田神宮に參拜を行ひ、今川義元の首級を供して、禮拜懇誠を輸し、社殿造營のことを神主に申出でたとの事である。そこで神主の方でも直ちに其の乞に應ずることとなり、彼の手によつて修造が行れたのであつた。

王朝時代以來、追々と領地を廣ろめ、且つ自家の領地防衛のため、數多の僧兵を養ふに至りし大寺院は、いづれも皆精神界の崇高な教化事業を閑却し、僧侶共に暴虐無慙の行爲が少くなかつた。信長は頻りに其の無道を矯正せむとし、比叡山を燒討したため僧徒の勢力は非常に衰ふるに至つた。秀吉は亦彼の遺圖をつぎ、根來を破つたため、徳川時代になつて、容易に僧侶を駕御することが出來得たので

ある。安土時代、桃山時代が全く徳川氏昇平三百年の準備時代たりしことが能く了解せられるのである。

三十六丁一里の制度も、京都所司代の官の設置も、徳川氏によりて京都睥睨の營造物として利用せられたる二條城の築造も、皆悉く信長の創意に出てゐるのである。そんな譯であるから、彼が先づ自己の領内の道路改良に留意したことは勿論であつた。かの桶狭間の戦のとき、信長が「螺ふけ具足よこせ」といつて、急に武裝して、清須の居城を出陣したときには、主從僅に六騎であつたが、熱田まで三里の間を進むうちに、馬上六騎、雜兵二百人になつた。これは信長の家士や農民までが、領主の出陣と聞きつけ勢込んで馳せ參じて來たのであるが、斯く速に集り得たのは道路の完備も與つて、大に力があつたと見なければならぬ。

總じて當時の道路なるものは、各藩割據の結果、交通の不便却つて國防の手段と信ぜられてゐたため、險惡の儘で放置せられてゐた有様であつた。信長の着眼は全く之れと

正反對で、彼が自己の朱印に「天下布武」の文字を刻したのを見ても解る如く、交通を便にして、應仁以來亂れたる天下を統一して、蒼生を安ぜしめんとしたのであつた。従つて永祿十二年に、將軍義昭が信長の功を賞せんとしたのを辭退して、幕府管内の關稅を免除することゝし、又天正二年十二月に管内の道路の幅を三間と定めて、沿道の村々に修築させ、道路の兩側に松や柳の並樹を植えしめ、川には又橋や舟橋を架せしめた。戰國の諸侯は又所在險要の地に關所を設け、これによつて警備を嚴にすると共に、また旅人に關稅を課して收入の一助としてゐたから、これを打破するの必要を認め、彼は入洛と同時に商旅來往の便を妨ぐる關所の撤廢を嚴命したのである。尙ほ當時海内第一の要津であつた泉州の堺やら琵琶湖の大津並に伊勢路と美濃路との交叉點たる江州草津等の諸地點に代官を置いて以て交通の利便を計ることゝした。

本能寺の變に依つて、信長の雄圖は挫折するに至つたが秀吉が能く之を繼承するありて、京都は都市計畫上の便益

を得るに至つた。秀吉は洛中洛外等の境界なきを憂ひ、天正十九年正月から諸侯に命じて、四境の堤溝を造らしめた。更に古來の規模によつて市街を區劃し、寺院の市中に散在せるものは、之を東京極に移し、三條及五條の大橋をも架するに至つて、ここに始めて都城の形式始めて整備し、秩序の恢復を見るに至つたのである。これ皆其の主信長の雄圖の完成に他ならないので、而かも、施政の根本觀念も亦信長と少しも違ふ所がなかつた。信長が右大臣たりしに倣つて、秀吉は關白となつたが、何れもこれ一箇の延臣であつた。朝廷に在つて職務を執る職員に過ぎなかつた。廷臣たる官職には、何人が任せられても差間は無い譯である。源平藤橘何人でも適任者を御選びになつて其の位置に處き給ふ、是れ至尊の大權の發動であつて、即ちこのことが御親政の御親政たる所以である。

然るに徳川氏の國命を執るに至るや、全然織豊二氏の時とは選を異にし、別に幕府を置き、全く朝廷をば有名無實の飾り物となし、事大小となく己れ專決するといふ方針に

出でたのであつた。家康と對比すれば大義名分を重じて終始一貫したる實に信長主従の如きは史上稀れなものと謂つてよからう。従つて信長が「道ある世ぞと人に知らせ」た鴻業は後世のまさに瞻仰すべき所で無ければならない。而かも一身を犠牲として本能寺畔の烟と消えたが、叛臣明智光秀に對しては、世人いたく之に指彈を加ふるに至り、こ

ゝに戰國亂麻の時代より轉じて、倫常即ち人の人たる道が重ぜらるゝ泰平の時代に一步を歩み入れしむることゝなつた。従つて精神上物質上の兩方面より見て、我が交通史上織田信長の名は不朽にとどむべきものなることを明かに知るべきである。

——十二月二日稿——

交通企業として觀たる鐵道と自動車

菅 健次郎

交通企業界に於ける鐵道の地位

限りなき發達を遂げつゝある自動車をして鐵道の代行機關たらしめんとする傾向は世界各國に於て看取し得る。國有鐵道主義を採れるドイツ、スイス、スエーデン、イタリ

1、南アフリカ聯邦の諸國でも鐵道の經濟經營を鐵道のみ求めず自動車にも求めんとして國營自動車に向つて居るのである。かくして會て保持したる交通企業界の地位を再び奪還し得るか。

私設の鐵道は固りこの點に如才がない譯はない。鐵道會